

平成 26 年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム
総持学園創立九十周年・仏教文化研究所設立二十周年記念

心の安らぎを求めて —仏教者の社会参加—

講演資料集

鶴見大学仏教文化研究所・先制医療研究センター 共催

会期： 平成 26 年 6 月 14 日(土) 13 時 30 分～

会場： 鶴見大学会館地下 1 階メインホール

目 次

タイムテーブル	1
講師紹介	2
老病死の事例に学ぶ仏教	積 徹宗...4
ビハーラ秋田の活動の展開と今後の課題	新川 泰道...5
より添い「支縁」で人をつなぐ	金子 昭...8
終末期医療を支援する臨床宗教師の育成事業	前田 伸子...9

タイムテーブル

会 場	鶴見大学会館地下1階メインホール（神奈川県横浜市鶴見区豊岡町3-18）	
13:00~	開場・受付	
13:30~13:40 (講師紹介を含む)	開 会 総合司会 下室 覚道（本学准教授・仏教文化研究所主任）	
	開会の辞 伊藤 克子（本学学長・仏教文化研究所所長）	
13:40~14:10	基調講演 積 徹宗（相愛大学教授）「老病死の事例に学ぶ仏教」	
時 間	講 師	題 目
14:10~14:40 (講師紹介を含む)	新川 泰道 (ビハーラ秋田代表・宝昌寺住職)	「ビハーラ秋田の活動の展開と今後の課題」
14:40~14:50 休 憩		
14:50~15:20 (講師紹介を含む)	金子 昭 (天理大学おやさと研究所教授)	「より深い「支縁」で人をつなぐ一縁社会を有縁化する「人間菩薩」の思想と実践」
15:20~15:50 (講師紹介を含む)	前田 伸子 (本学副学長)	「終末期医療を支援する臨床宗教師の育成事業に関して」
15:50~16:05 休 憩		
16:05~16:55	パネルディスカッション&質疑応答 積 徹宗・新川泰道・金子 昭・前田伸子・木村清孝 (司 会) 尾崎 正善（本研究所客員研究員）	
16:55~17:00	閉会の辞 木村清孝（本研究所特別顧問）	

講師紹介

積 徹宗 (SHAKU Tesshu)

相愛大学教授

最終学歴・学位：大阪府立大学大学院人間文化研究科比較文化専攻博士課程修了。学術博士。

専門分野：比較宗教思想

主な著作：

『不干斎ハビアン』（新潮選書）

『ブツダの伝道者たち』（角川選書）ほか。

新川 泰道 (NIKAWA Taido)

ビハーラ秋田代表・宝昌寺住職

■現在の所属・役職など

・ビハーラ秋田 代表

（仏教の立場から医療や福祉など、“いのち”の問題を考えるボランティアグループ）

・心といのちを考える会 事務局長（地域で自死問題を考える住民の会）

・藤里町国際交流協会 理事

・藤里町生涯学習奨励員

・藤里町社会福祉協議会 理事

・保護司 など

■これまでの経歴（宗門関係）

・秋田県曹洞宗青年会 事務局長（平成 13・14 年度）

同 会 災害復興支援本部副部長（平成 23・24 年度）など

・全国曹洞宗青年会ボランティア委員会 副委員長（平成 19・20 年度）

・曹洞宗東北管区教化センター 企画委員（平成 23 年度～）

■被災地支援に関して

平成 7～9 年 阪神淡路大震災の被災地にて支援活動に参加

以降、新潟中越地震（平成 16 年）や能登半島地震・中越沖地震・北秋田市水害（平成 19 年）などの被災地支援活動にも参加

東日本大震災では平成 23 年 3 月より、岩手県陸前高田市・釜石市・大槌町・山田町などにて活動。また福島の子供達を秋田に招いた保養プログラム「白神ぶなっこ教室 with ふくしま KIDS」などを開催。

自坊においては地元の子供達を対象とした「ぼうさい防災てらこや寺子屋」など随時開催

金子 昭 (KANeko Akira)

天理大学おやさと研究所教授

最終学歴・学位：慶應義塾大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程・哲学博士

専門分野：宗教倫理学、宗教社会福祉論

主な著作：

『シュヴァイツァー—その倫理的な神秘主義の構造と展開』（白馬社、1995年）。

＊同書により1995年の和辻賞（日本倫理学会賞）を受賞。

『天理人間学総説—新しい宗教的人間知を求めて』（白馬社、1999年）。

『駆けつける信仰者たち—天理教災害救援の百年』（天理教道友社、2002年）。

『宗教原理主義を超えて』（富岡幸一郎との対談による共著、白馬社、2002年）。

『〈思考〉の作法—哲学・倫理学はじめの一步』（共著、萌書房、2004年）。

『天理教社会福祉の理論と展開』（共著、白馬社、2004年）。

『驚異の仏教ボランティア—台湾の社会参画仏教「慈濟会」』（白馬社、2005年）。

『天理経営論総説』（天理大学おやさと研究所、2010年）。

2011年に超宗派の宗教者や宗教研究者のコラボによる地域活性化グループ「支縁のまちネットワーク」を立ち上げ、現在その事務局長をつとめている。

前田 伸子 (MAEDA Nobuko)

本学副学長・歯学部教授

本研究所所員

【学歴・略歴】

1976年 3月 鶴見大学歯学卒業

1976年 4月 東京医科歯科大学歯学研究科入学（口腔細菌学専攻）

1980年 3月 東京医科歯科大学歯学研究科修了（口腔細菌学専攻）

1980年 4月 鶴見大学歯学部非常勤講師（口腔細菌学）

1981年 4月 同上 講師

1988年 12月 米国フロリダ大学歯学部 Post Doctor として留学

1989年 12月 鶴見大学歯学部講師として米国から戻る（口腔細菌学）

1991年 4月 同上 助教授

1999年 12月 同上 教授

2009年 5月 鶴見大学 副学長 現在に至る

【所属学会】

歯科基礎医学会、日本歯科薬物療法学会、JADR

日本細菌学会、日本口腔衛生学会、日本歯周病学会、日本歯科保存学会

日本口腔外科学会、日本歯科医学会、日本歯科教育学会

老病死の事例に学ぶ仏教

釈 徹宗（相愛大学教授）

■自分自身が住職をつとめる寺院の裏で、認知症高齢者のグループホームを NPO で運営しています。もともと社会福祉が専門というわけではなく、高齢者問題に関心があったわけでもありません。いくつかのご縁でこれまでやってきました。

いつの間にか関わることになった、というような志の低い私ではありますが、それでも活動を通じて多くのことに気づかされます。時には「ああ、そうか。仏教はこれを説いていたのか」と実感することもあります。いくつかの事例をご紹介しますながら、その部分についてお話ができればと考えております。

◇今日のお話のポイント

- ①複眼的視点をもつ インド「死を待つ家」。韓国「病院内の宗教スペース」。
- ②いろんなコミュニティにかかわる 「スペース ALS-D」。生前個人墓「自然」。

◇【むつみ庵の紹介】 認知症高齢者のグループホーム※

- ①「古民家改修型」 … 地域に支えられる里家
- ②「お寺-檀家制度を活用」
- ③「不合理なものを大切に」
 - 周辺症状はなんとかなる！？
 - 住環境における文化の重要性 … アフォーダンスと身体知

※グループホーム：

「同じ障害をもった人が集まって共同生活」「生活単位が小さい」
「スポット型よりも長時間のケア」「在宅と施設の隙間をうめる」
「立ち上げや運営にコストがかからない」「生活感がある」
「同じ顔ぶれでケア。小規模ならでは。その土地・地域の匂い」

【私の気づき】

- ①あらためて「三毒」を考える。あらためて「自分の枠組み」を考える。
- ②なかなか壊れない「自分」。
- ③我が身をまかせる覚悟を養う。

ビハーラ秋田の活動の展開と今後の課題

新川泰道（ビハーラ秋田代表・宝昌寺住職）

■ビハーラ（Vihara）とは

サンسكريット語で「安らぎ、息抜き、休養」の意、転じて「寺院」を指す。

「ビハーラ秋田」は平成4年に結成、終末期医療を中心に現実的な“いのち”の問題について仏教を背景に考え、実践しようとの趣旨で活動を継続中。会員は超宗派の僧侶、医療・福祉関係者、それらに関心のある一般の方々で構成されている。

■活動の内容と展開

結成当初は「ビハーラセミナー」と称しての学習会が中心で、終末期医療への理解と参究、また関連するテーマとして高齢者介護、自殺（秋田県は20年以上「自殺率全国一」を記録）、脳死・臓器移植、グリーフケア等について、医療・福祉関係者、大学教授など学識経験者、またがんや臓器移植経験者などを招いて行う。

その後、高齢者施設や緩和ケア病棟での慰問活動、被災地支援バザー（阪神淡路大震災など）、また被災地での現地活動などの実践にも関わるようになる。

それらと平行して、活動の背景となる仏教の思想、特に「生老病死」について仏教ではいかにとらえるのかを平時から敷衍することがビハーラ活動には重要ではないかという観点から、公民館や喫茶店などを会場とした仏教講座も開催する。

今年から「がん患者と家族のサロン」を実施、病院外での終末期医療との接点を探り、家族の情報交換や息抜きの場の提供を心がけている。

■東日本大震災での活動

発生直後の3月から岩手県沿岸部への救援物資搬送、足湯サービス、がれき撤去、避難所や仮設住宅での「サロン」開催、各種激励イベントや相談会の開催、追悼行事への参加などを行う。また福島の子供達を招いての保養プログラムを白神山地で開催、関連して原発事故による避難者の現状に関する学習会も実施。上記の活動に際して、チャリティTシャツを企画販売（約5千枚）、収益を仮設住宅の備品や震災遺児の奨学金、移動図書館活動への支援などに充てる。

現在、被災地での保健師を題材としたドキュメンタリー映画の上映会を岩手県大槌町で計画中、これからの住民の“支え合い”をいかにすべきかを考える機会としたい。

被災地は高齢化・過疎化が進み、追い打ちをかけるように震災を経験、今後は医療や福祉に過度な期待はできない中、住民が心身の健康を保つための仕組み作りが問われている。被災地支援を通して私達も共に学ぶべき課題であり、今後も継続的な関わりが重要と考えている。

■今後の課題

当会の結成当初、セミナーで「医師と間近で相談できる」機会は希有であった。近年は医師会や大病院が主催する講座や学習会增加、当会ならではのセミナー企画に苦心している。

「僧衣で病院に」、今なお社会のコンセンサスを得られていない点にはもどかしさを禁じ得ないものの、病院や高齢者施設には宗教的ニーズが確実に存在する。それらを可能な限り受け止めつつ今後の活動の指針にしたい。

**県曹洞宗青年会
ビハーラ秋田**

県曹洞宗青年会（久米弘道会長）と県北の仏教、医療関係者でつくるビハーラ秋田（新川泰道代表）は21日、東日本大震災

支え合おう
東北
秋田からいへんけんじや

で被災した岩手県大槌町の仮設住宅を訪れ、被災者に達筆な文字で書かれた表札をプレゼントした。被災地でボランティア活動を行ってきた両団体にとって初めての試みだったが、評判は上々。被災者は玄関前に掲げられた新品の表札をうれしそうに眺めていた。

「表札、交流の一助に」

墨痕鮮やか70枚
仮設住宅に贈る

岩手・大槌町



筆で木片に仮設住宅の表札を書く僧侶

両団体によると、被災地でがうまくいかなかったり、訪は表札が無い仮設住宅が多く、えないうことがあるといふ。このため、コミュニティーづくりのため、コミュニケーションを改善しようと企

画した。両団体の15人のほか、岩手県曹洞宗青年会、被災地で移動図書館を行っているシャントイ国際ボランティア会岩手事務所からも参加。計約30人が二手に分かれて町内4カ所の仮設住宅を回り、計70枚の表札を手作りした。約20世帯が暮らす赤浜第3仮設住宅では、集会所を訪れた被災者にお茶やコーヒーを振る舞いながら、僧侶が持参した縦約20センチ、横約10センチの木片に墨痕鮮やかに住民の名前を書いた。表札の裏に仏画

を描くサービスも人気を集めた。玄関に掲げずにお守り代わりに持ち帰る被災者もいた。新川代表は「ブライパシーを気にする住民も多いので

復興支援Tシャツ
売上金50万円寄付
山田町の教育基金へ
県曹洞宗青年会とビハーラ秋田は21日、岩手県山田町の東日本大震災遺児を支援する鈴木善幸記念教育基金に、チャリティーTシャツの売上金50万円を寄付した。

両団体は今年5月、復興支援Tシャツを製作し、これまでに約3千枚を販売。岩手県内でボランティア活動をする中で、基金の設立に携わった岩手県立山田病院の平泉宣医師（大館市出身）と知り合い、基金が同町出身の鈴木善幸元首相の遺訓「足らざるを憂えず、等しからざるを憂う」を理念に設立されたことを知って感銘を受け、寄付することにした。

受け入れられるか心配だったが、喜んでもらえて良かった。近所付き合いを取り戻すきっかけになれば」と話していた。

基金は同町の高校生を対象に月額3万円を1年間貸与。返済は無利子、無期限。現在24人が申請している。



沼崎町長（右）に寄付金の目録を手渡す久米会長

沼崎町長（右）に寄付金の目録を手渡す久米会長

ビハラー秋田 20周年フォーラム

「命めぐる問題 考える足場に」

能代 700人、事例通じ尊さ学ぶ

県北部の僧侶や医療関係者らでつくるビハラー秋田（新川泰道代表）の結成20周年記念フォーラムが28日、能代市文化会館で開かれた。パネルディスカッションと講演を通し、約700人が命の尊さについて考えた。

新川代表が「結成以来の20年、ビハラー秋田は終末医療や臓器移植、自死など、命をめぐる問題と関わってきた。命と向き合うということは、人の苦しみや悲しみと向き合うということでもある。フォーラムが命について考える足



場になればありがたい」とおっしゃる。 「『いのち』と向き合っ

てきた。 美枝子さんがパネリストを務めた。 奈良さんは患者を自宅でもった経験を紹介しながら、

命の尊さについて意見を述べた。パネル討

議では、北秋田市の開業医の奈良正人さん、ビハラー前代表で藤里町「月宗寺」住職の袴田俊英さん、北秋田市民病院看護副部長の中嶋

尊厳死と延命治療それぞれについて「意味はある」と説明。「最期をどういう形で迎えたのかを、日ごろから家族や主治医と話し合うべきだ」と述べた。

袴田さんは「私たちが大切にしているのは命そのものではなく（お金や地位など）生きていくための条件になってしまったのではないか。宗教は、命を取り巻く問題を考える上で規範となる」と提起。中嶋さんは「医療職だけでなく、宗教、福祉などの分野の人ともつながりを深められ、成長させてくれた」と、ビハラーでの20年を振り返った。

また、福島県三春町の「福聚寺」住職で芥川賞作家の玄侑宗久さんが「東北の底力」と題して講演した。

ビハラー秋田は1992年に結成され、命をテーマに公開講座などを開催。東日本大震災後は被災地にボランティアバスを運行するなど支援を続けてきた。（吉田新一）

より添い「支縁」で人をつなぐ

—無縁社会を有縁化する「人間菩薩」の思想と実践—

金子 昭（天理大学おやさと研究所教授）

「支縁」とは、文字通り縁を支えるということです。私たちは、家族の縁、友人の縁、学校の縁、職場の縁、地域社会の縁など、さまざまな縁に支えられて生きています。そうした縁を自覚したとき、私たち自身もまた縁を支える存在なのだとあらためて気が付かされます。そもそも人間社会とは、お互いに縁を支え合って成り立つものなのです。

私たちの周囲では、さまざまな生きづらさの問題が起っています。家庭内暴力、依存症、虐待、いじめ、不登校、引きこもり、貧困の連鎖、単身者の高齢化、老老介護、孤独死、自死などなど、枚挙にいとまがありません。多くの場合、これらの問題は、当事者またはその家族の社会的孤立のために、一般には見えにくくなっています。それは、何らかの理由で人間関係が断ち切られて、人々がいつのまにかお互いに「無縁化」してしまっているからです。無縁社会と呼ばれるものの正体も、実はそこにあります。

大切なのは、断ち切れた縁を新たにつなぎ直すことです。そのつなぎの縁（結縁）を宗教者（仏教者）がどう提供できるか。そのために、より添い「支縁」の活動があります。より添い「支縁」、それは息の長い伴走型支援でもあります。宗教的な意味での「支縁」が目指すのは、そうしたたすけ合いの活動を通じて、だれもが神仏の縁で結ばれた尊い存在だということに気付かせていくことにあります。

この世に生きているかぎり、どんな人でも自分のいのちを通じて神仏の縁につながっています。人の縁のもう一つ向こうに見えるのが、この大きなご縁の存在です。宗教者（仏教者）の目指す「支縁」は、生活面での「救援」という形を取りますが、それは同時に神仏とのつながりを通じての心魂の「救済」をも志向しているものなのです。

ここで注目したいのは、世界最大の仏教 NGO・台湾の仏教慈濟基金会（慈濟会）の社会参加の思想です。慈濟会では社会参加を行う際の基本理念として、「無縁大慈、同体大悲」という表現を用います。無縁大慈とは、無縁の者にも大きな慈しみをかける大きな愛のことであり、同体大悲とは、同じ体であればどこが痛んでも自分の痛みとして感じるように、衆生の苦しみを自分の痛みとして受け取るという意味です。そこには、無縁社会を有縁化する思想があり、またそのような働きを行う者を「人間菩薩」と言います。そして、人間はみな仏性を持つがゆえに、だれもが「人間菩薩」なのです。

いわゆる職業的宗教者（仏教者）だけが宗教者（仏教者）ではありません。だれもが「人間菩薩」として慈悲喜捨の実践を行えば、この世を織りなす縁の姿を善が循環するありように変えていくことができるのです。無縁社会が解消され、良き縁へと人々を結んでいく結縁社会への道筋も、この善の循環の中に垣間見ることができます。

本講演では、主に慈濟会の社会参加の思想と実践を紹介しながら、より添い「支援」で人をつなぐ宗教的（仏教的）実践について考えるところを述べてみたいと思います。

終末期医療を支援する臨床宗教師の育成事業

前田 伸子（鶴見大学・同短期大学部 副学長）
佐藤 慶太（先制医療研究センター 主任）

3年前、東北地方を襲った未曾有の大震災のあと、近隣の寺社が避難所となっただけでなく、宗教家個人や教団が被災者の方々の心の支えなどで大きな役割を果たし、宗教の社会的貢献が注目を集めた。遡ること19年前の阪神大震災でも、宗教家による宗派を超えたボランティア活動が震災後、直ちに開始され、現在も継続され、被災者の方々の精神的支柱になっている。

一方、終末期医療において尊厳死を認知・遂行するための法制化の動きが急速に進んでいる。仮に法制化が実現した場合、尊厳死の選択は患者の意思に基づくものの、医療者からの積極的な意思確認のアプローチによって実施されることは容易に予想される。しかし、現状は終末期医療を提供する施設等の整備が進んでいないだけでなく、体制の不備以上に深刻な問題として、死を受容する患者への精神的な支えや残された家族に対するケアに誰がどのように関わることが検討されていない。

公益財団法人日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団が、2011年に全国の一般人を対象に行ったアンケート調査にある「死に直面したときに、宗教は心の支えになるか」とする問いに対し、約54.8%が「支えになる」と回答している。これを2008年の同調査と比較すると、約15%も増加しており、同財団は「これまで宗教に無関心だった人たちでも、死に直面した時の宗教の役割を肯定する人が増加している」と分析している。

このような状況の中で、大学等の教育研究機関が宗教学的観点から新たな試みに取り組み、東北大学では、終末期医療の現場でスピリチュアルケアを担う日本版のチャプレン（臨床宗教師）の養成を目的とした実践宗教学寄附講座を設置し、精力的に活動を行っている。この取り組みは、終末期医療の現場において、医療者と協働して活動する臨床宗教師の養成に的を絞って系統的に実施するものである。

本学でも仏教系教育研究機関であること、医療系の学部があることの特長を活かし、總持寺と連携し、曹洞宗修行僧等を対象とした『終末期医療を支援する臨床宗教師等の育成事業』を開始することとなった。本事業は「終末期医療を支援する」ことを最終ゴールとしているが、宗教者と医療者が一体となっ



て、相談者に寄り添い、悩みを傾聴することを最重要の目標としている。今年度は「ひと」を知り、その心に寄り添うための基礎的なコミュニケーション能力について、演習を中心に学び、傾聴に必要な知識、技能と態度の修得を目指す。本シンポジウムでは5月22日に始まったばかりの研修の様子をご紹介します。

平成26年5月22日第1回研修; 質疑応答

鶴見大学仏教文化研究所・先制医療研究センター 共催
平成 26 年度公開シンポジウム講演資料集
「心の安らぎを求めて―仏教者の社会参加―」

発 行 日 2014 年 6 月 14 日
編集・発行 鶴見大学仏教文化研究所
〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見 2-1-3
E-mail: bukken@tsurumi-u.ac.jp